



特集

6年間の中期目標・
計画期間の実績
吉田学長の軌跡を辿って



特集

6年間の中期目標・ 計画期間の実績

吉田学長の軌跡を辿って

平成25年3月31日、吉田浩己学
長が退任を迎える。今回の特集
では、吉田学長が中心となって策
定・実施した、大学運営の要とな
る「第1期中期目標・中期計画」
と「第2期中期目標・中期計画」
を基に、6年間の任期中に達成
した目標や具体的な成果などに
ついて語っていただいた。ここか
ら、平成25年度以降に向けての
鹿児島大学の将来像を探る。

鹿大広報

鹿大 KADAI JOURNAL ジャーナル*

No.192 SPRING 2013

contents

- 2 特集
6年間の中期目標・
計画期間の実績
～吉田学長の軌跡を辿って～

- 10 鹿大生's EYE
震災を風化させない
～私たちにできること～

- 12 マナビの扉
表象文化論演習
映像を軸に、社会や世界とつながる

- 14 知のフロントライン
海洋ごみの発生抑制の研究と
啓発活動に取り組む
水産学部 藤枝繁 教授

- 16 プロの矜持
研究者・中島利博(医学部卒業)

- 18 連携のチカラ
アナログデータを伝送する
ロータリーリンクコネクタの開発
～日本マルコ株式会社との連携～

- 20 鹿大Topics
表彰関係 ほか

- 27 かごしま探訪
「鹿児島における小規模小学校の課題
～複式学級の可能性を考える～」
教育学部教育心理学専攻
假屋園 昭彦 教授



(座談会出席者)

吉田 浩巳 / 鹿児島大学長

前田 芳實 / 鹿児島大学理事(研究担当)

白尾 真紀 / 鹿児島大学総務部

労務調査室労務調査係係員

〔進行〕

萩野 誠 / 鹿児島大学副学長(広報・情報担当)

萩野 お集まりいただき、ありがとうございます。吉田学長は就任以来、第1期中期目標・中期計画、第2期中期目標・中期計画の策定と実践にリーダーシップを発揮され、鹿児島大学の発展に努めてこられました。本日は吉田学長に鹿児島大学長としての6年間(2期間)を振り返っていただき、平成25年度以降の展望につながるお考えをお聞かせいただきたいと思いますところですので。まずは学長就任当初のお考えをお聞かせいただけますでしょうか。

学長 平成19年1月12日に学長に就任するにあたり、社会の要請に応え、「知の拠点」としてより存在意義のある総合大学として本学が発展していくためには、各々の教職員がさらなる創意的な教育研究社会貢献活動により、大学の基本単位である学部・大学院が卓越した新しい豊かさの創生力とその担い手の育成力を備えることが根幹で

鹿児島大学長

吉田 浩己

よしだ・ひろき／

昭和44年鹿児島大学医学部卒業。昭和45年鹿児島大学大学院医学研究科入学。昭和46年～48年シカゴ大学ベン・メイ癌研究所留学。昭和49年愛媛大学医学部助手。昭和55年愛媛大学医学部助教授。昭和58年鹿児島大学医学部教授。平成15年鹿児島大学医学部長、医歯学総合研究科長。平成19年より鹿児島大学長。平成22年国立大学協会副会長・理事。平成23年国立大学協会監事。

あると考え、「教育・研究・社会貢献の現場を重視し、現場を活性化する」を管理運営の基本としました。

前田 具体的にはどのような管理運営体制をつくられたのでしょうか。

学長 まず、平成19年2月には、それまでは、学長と理事等のみで構成されていた「大学運営会議」に、現場の責任者である学部長や研究科長を加え、「大学運営会議」をトップダウンとボトムアップを連結する要としました。教育研究評議会、経営協議会や役員会で審議決定される改善・改革案はまず、「大学運営会議」において、現場と全学的な視点で十分に検討され、現場で責任をもって遂行可能なものに仕上げた上で提案するようにしました。

次に、教育・研究・社会貢献等の活性化のための改善や改革を円滑・迅速に行うために、管理運営体制を整備しました。学長の下に、企画立案および実施組織として「室（担当理事、副学長、学長補佐、センター長、事務部長、課長等で構成）」を新たに設置し、委員会（担当理事、部局選出委員で構成）は調整と評価組織とし、大学運営会議、教育研究評議会、経営協議会、役員会を審議・決定のための全学会議としました。企画立案、調整、決定過程を学長のリーダーシップの下においたこの管



理運営体制により、企画して1カ月以内で決定できるようになり、それまでと比べ、はるかに迅速に改革が前進するようになりました。

前田 管理運営体制を見直したことで、意思決定がスムーズに行われ、改革にもスピード感が出てきたわけですね。他にも何か工夫をされましたか。

学長 現場の意見を直接聞くために、全ての教授会を訪問しました。その結果、運営費交付金の削減等による影響で現場の教育研究力が急激に低下しつ

前田 芳實

鹿児島大学理事(研究担当)



まえだ・よしざね／昭和42年鹿児島大学農学部卒業。昭和44年鹿児島大学大学院農学研究科博士前期課程修了。同年鹿児島大学農学部助手。昭和56年鹿児島大学農学部助教授。平成6年鹿児島大学農学部教授。平成13年～平成14年鹿児島大学遺伝子実験施設長。平成14年～平成16年鹿児島大学生命科学資源開発研究センター長。平成18年～平成21年鹿児島大学農学部長。平成21年より鹿児島大学理事(研究担当)。

つあることがわかりました。この事態の改善に直ちに対応すべきと判断し、平成19年4月、「教員の適正な学内配置と学長裁量定員」および「予算編成のあり方と学内予算配分方式」についての特任委員会を立ち上げました。全学より選出された委員による真摯な検討により生み出された答申に基づき、その後の学内教員配置と予算配分方式を定めるとともに、学部等の人事凍結を解除し、学部等への配分予算も増やすことができました。

前田 「鹿児島大学憲章」の策定も6年間の大きな成果の一つですね。私自身、大学憲章策定のための霧島ワークショップに参加し、皆でディスカッションをしたことが非常に印象に残っています。

学長 大学憲章策定前の状況をお話ししましょう。全国には86の国立大学法人がありますが、国立大学の法人化を境に国からの運営費交付金は年々減少し、少子化と国際化が進むなど、大学を取り巻く環境は一段と厳しくなっていました。そんな中、鹿大が堅持すべきことは何かを明確にし、それを実行するための機能強化に全力を挙げて取り組まなければ本学の未来はないと、構成員は強い危機感をもっていました。そこで平成19年8月、99名の教職

員と経営協議会外部有識者が霧島で1泊2日のワークショップを開催し、本学が堅持すべき基本理念と果たすべき役割を夜遅くまで検討し、「鹿児島大学憲章」の素案をまとめました。この素案に対する県民や同窓会員からのパブリックコメントを頂いた上で、平成19年11月15日の本学の第58回開学記念日に制定しました。鹿児島は、我が国の変革と近代化を推進する過程で、多くの困難に果敢に挑戦する(『進取の精神』を有する)人材を育成してきました。鹿児島大学はこのような教育的伝統を継承し、自主自律と進取の精神を尊重し、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす本学の決意を学内外へ宣言しました。大学憲章は鹿児島大学の新たな船出の羅針盤であります。また、平成19年12月には、220名を超える教職員が参加する「将来構想」についてのワークショップも開催しました。

前田 「進取の精神」という言葉は、鹿大の教育・研究・社会貢献、すべてのキーワードとなり得る言葉だと思います。

白尾 第2期中期目標・中期計画の検討はいつ頃から始められたのでしょうか。



鹿児島大学総務部
労務調査室労務調査係係員

白尾 真紀

しらお・まき /
総務部労務調査室労務調査
係 係員。

境で質の高い教育を行い、『進取の精神』を有する若者を育成する」大学の実現への挑戦です。第三点は、「学生は『進取の精神』の修得と後輩への継承に果敢に挑戦するとともに、教職員も、『進取の精神』をもって教育、大学改革等へ責任ある参画をする、『進取の気風』に溢れる」大学の実現です。鹿児島島の人々の誇りである進取の気風を鹿大がしっかりと継承し、わが大学のアイデンティティにするための挑戦開始です。

白尾 まだ第2中期の途中ですが、「挑戦」の成果は出ていますか。

学長 大学憲章を具現化するための第2期（平成22年から平成27年）中期目標と計画の検討は、まだ、第1期中期目標の達成に懸命に取り組む中、平成20年7月より開始しました。教職員に公開して開催された23回の戦略会議（学長が議長）により草案がまとめられ、平成21年2月には稲盛会館で開催した全学公聴会や各教授会で、全学からの意見を反映させ、平成21年7月に決定されました。第2中期には、「1. 『進取の精神』を有する学士を育成する、2. 大学の特色を活かし、島嶼・環境、食と健康などのグローバルな課題解決の

ための研究活動に果敢に挑戦する、3. 地域社会の活性化に貢献する、4. 国際的に活躍できる人材を育成する、5. 社会に開かれたキャンパス環境を整備する」を基本目標とし、その下に42の中期目標と69の中期計画を掲げ、これらの実践により、第2中期の6年間に600の具体的成果を挙げることを策定しました。そして、まだ第1中期の平成21年度中より、計画を前倒しして果敢に取り組みを始めました。

白尾 第2中期の特色を教えてください

い。

学長 第2中期は、大学憲章の具現化に挑戦する最初の中期でありますので、中期前半はその後の飛躍のための基盤づくりを重視すべきと考え、次の3点に全学を挙げて取り組むことにしました。第一点は、大学憲章の理念、すなわち、「『自主自律と進取の精神』を尊重し、地域とともに社会発展に貢献する大学をめざす」、の全構成員による共有化と力強い実践開始です。第二点は、「日本の中で、学生を最も大切にし、最も素晴らしい学習環

学長 国立大学としては北海道大学に次ぐ全国2番目で、本学にとっては、歯学部以来、34年ぶりとなる新学部、共同獣医学部の平成24年度設置と山口大学とともに日本トップレベルの共同教育課程の構築、さらに、北海道大学と帯広畜産大学とも連携して、アジアでは唯一の国際認証の卓越した獣医学教育の拠点形成への果敢な挑戦、熱帯・亜熱帯水域における高度洋上教育全国共同利用拠点としての日本最優秀練習船がこしま丸建造（平成23年度）、進取の精神を学ぶ、学生の自己研鑽の場となる「学生交流プラザ」（約5000㎡）の起工（平成24年度）や外国人宿舍の完成（平成24年度）など、学生



や教職員の様々な挑戦により、8、9頁に示すように数多くの見るべき成果が上がっています。その成果の中で、進取の気風が本学のアイデンティティとして形成される上で、要となる成果は、「鹿児島大学学生憲章」と「鹿児島大学教育目標」の策定があります。

前田 学生憲章は、学生自ら策定に参加しましたから、鹿大生ならではの熱い思いや意欲に満ち溢れたものになっていますね。

学長 学生憲章は平成22年11月15日、第61回開学記念日に制定しました。学

生自らがワークショップを開催して学生憲章を作り上げた国立大学は本学が全国で初めてです。「桜島のように高く、時には、激しさをもち、自らを磨き、未来を開いていきます」と謳い、「勉学に真摯に取り組むとともに、ボランティア活動やサークル活動などを通じて、人間力を養い、人格を陶冶するなかで、進取の気風を継承すること」を高らかに宣言し、力強く実践しています。鹿児島大学憲章を踏まえ、国民の期待に十分に応えうる素晴らしい内容に、心から感銘しています。このような憲章を自ら制定した学生諸君を誇りに思っています。

萩野 最後に、鹿児島大学教育目標に対する学長のお考えと、教育面における今後の課題についてお聞かせください。

学長 「鹿児島大学教育目標」は平成23年12月15日に制定され、鹿児島大学憲章を踏まえ、自主自律と進取の精神を有する人材の育成を本学の教育目標と定め、行動目標として問題解決能力の育成や進取の精神の涵養および社会発展に貢献する行動力、国際社会の発展に貢献できる実践力等の養成を明記しています。「『進取の気風』を本学のアイデンティティにする」、この熱

い思いを実現するためには、学生は自らつくりあげた学生憲章を力強く実践するとともに、教職員はこの鹿児島大学教育目標と行動目標を各教育課程の目標にまぎれずしっかりと取り入れ、目標到達のためのカリキュラムを整備し、このカリキュラムのPDCAサイクルをしっかりと実践することです。第2中期期間のみでなく、第3中期においても確実にこのことを継続していくことが必要だと思えます。そして、その他の面でも、今後、大学を取り巻く環境が如何に厳しくなるうとも、知の創生とその継承を使命とする知の拠点として、社会より信頼される道を懸命に模索し、進取の精神をもって、時代を先取りするような様々な改革に挑戦をしていく限り、鹿児島大学の未来は必ず開けるものと確信しています。このような過程を経て、鹿児島大学憲章の理念は具現化され、進取の気風に溢れた本学のアイデンティティ・校風が確立すると思っています。

萩野 本日は貴重なお話をありがとうございました。

*座談会は平成25年1月4日、鹿児島大学学長室で行われました。

萩野 誠

(広報・情報担当)

はぎのまこと／
平成21年より鹿児島大学副
学長(広報・情報担当)。

1. 「進取の精神の涵養」「質の高い教育・研究」 「素晴らしい学習環境」

* ()は年度

- ・ 鹿児島大学憲章制定 (19)
- ・ ボランティア支援センター設置 (20)
- ・ 歴史展示室設置 (21)
- ・ 鹿児島大学学生憲章制定 (22)
- ・ 「進取の気風」の商標登録 (22)
- ・ 鹿児島大学教育目標制定 (23)
- ・ 鹿児島大学進取の精神学生表彰制度制定 (23)
- ・ 鹿児島大学災害ボランティア活動事業実施要項制定 (23)
- ・ 学長と学部学生との懇談会制度制定 (23)
- ・ 鹿児島大学進取の精神チャレンジプログラム実施要項制定 (24)
- ・ 鹿児島大学サイエンス・インカレ支援要項制定 (24)
- ・ 学生サポート制度「鹿児島大学ピア・サポート」制度制定 (24)
- ・ 附属図書館「進取の精神」コーナー設置 (24)
- ・ 稲盛アカデミー棟建設 (20)
- ・ 学習交流プラザ起工と「進取の気風広場」命名 (24)
- ・ 海音寺潮五郎記念館(東京)受入決定 (24)
- ・ 農学部、理学部、法文学部、工学部、水産学部、教育学部、医学部・歯学部附属病院、共同獣医学実習棟、教育学部附属学校の建物改築・改修や教育学部陸上競技場等の改修、郡元・下荒田・桜ヶ丘キャンパス整備
- ・ スタートダッシュ学資金制度制定 (19)
- ・ 種村完司私費留学生支援基金制定 (22)
- ・ 鹿児島大学大学院メディアポリス教育振興基金による授業料免除制度制定 (23)
- ・ 鹿児島大学成績優秀学生奨学金授与制度制定 (23)
- ・ 大学院臨床心理学研究科設置 (19)
- ・ 稲盛経営技術アカデミーより稲盛アカデミーへ改組 (20)
- ・ 共同獣医学部設置 (24)
- ・ 国立大学獣医学系4大学群における欧米水準の獣医学教育実施に向けた連携体制の構築 (24)
- ・ 離島へき地医療人育成センター設置 (19)
- ・ 軽種馬診療センター設置 (21)
- ・ 水産学部附属練習船かごしま丸竣工 (23)
- ・ 地域防災教育研究センター設置 (23)
- ・ 焼酎・発酵学教育研究センター設置 (23)
- ・ 越境性動物疾病制御研究センター設置 (23)
- ・ 自然科学教育研究支援センター設置 (24)
- ・ 医用ミニブタ・先端医療開発研究センター設置 (24)
- ・ 寄附講座「焼酎学講座」開講 (19)
- ・ 寄附講座「地域医療支援システム学講座」設置 (23)
- ・ この他、寄附講座4講座を設置
- ・ 全学横断研究プロジェクト(鹿児島環境学など)開始 (20)
- ・ 大学院全学横断的教育コーススタート(島嶼、環境、食と健康) (22)
- ・ 超小型人工衛星ハヤト「KSAT」打ち上げ (22)
- ・ 鹿児島大学リポジトリ (23)
- ・ 「鹿児島環境学Ⅲ」南日本出版文化賞受賞 (24)
- ・ 北米教育研究センター設置 (20)
- ・ 鹿児島大学友好大使制度制定 (21)
- ・ 英語版ニューズレター「KU Today」発行開始 (22)
- ・ 鹿児島大学学生海外研修支援事業制定 (22)
- ・ 外国人宿舎(国際交流会館3号館)竣工 (24)
- ・ 稲盛アカデミーベトナム事務所設置 (21)
- ・ 海外の大学間学術交流協定を16校締結

吉田学長の 6年間の 主な成果



学生憲章公表

鹿児島大学憲章及び 鹿児島大学学生憲章を制定

鹿児島の教育的伝統である「進取の精神」を受け継ぎ、高い倫理性と社会性を備え、向上心を持って自ら困難に立ち向かい、地域および国際社会で、活躍しうる人材を育成することを本学の基本理念にすることを大学憲章としてまとめ、平成19年の開学記念日に学内外に宣言しました。また、学生は、自らの行動指針となる学生憲章をまとめ上げ、平成22年の開学記念日に制定しました。

「進取の気風」を商標登録

第2期中期目標・中期計画の柱としてその前文でも謳われている「進取の気風」について、特許庁より申請が認められ平成22年9月に商標登録を行いました。



商標登録証を手にする吉田学長



本学卒業生の中国医科大学教授へ友好大使を委嘱(平成23)

鹿児島大学友好大使制度を導入

平成22年度より留学情報、研究情報等を発信・収集し、留学生交流および国際学術交流を図る目的で、帰国留学生や学術交流協定校の教員等に鹿児島大学友好大使を委嘱しています。友好大使は、平成24年度中に100名を越える予定です。

ベトナム社会科学院〔ベトナム〕(19)
西ジョージア大学〔アメリカ合衆国〕(19)
フィリピン大学〔フィリピン〕(19)
カセサート大学〔タイ〕(20)
マレーシアサバ大学〔マレーシア〕(20)
スラナリ工科大学〔タイ〕(21)
マレーシアプトラ大学〔マレーシア〕(21)
ボゴール農科大学〔インドネシア〕(22)
リンシェーピン大学〔スウェーデン〕(22)

ディポネゴロ大学〔インドネシア〕(22)
バンドン工科大学〔インドネシア〕(22)
サンカルロス連邦大学〔ブラジル〕(23)
サンノゼ州立大学〔アメリカ合衆国〕(24)
韓国木浦大学校〔韓国〕(24)
アンカラ大学〔トルコ〕(24)
首都経済貿易大学〔中国〕(24)
この他、この間海外の大学との部局間学術交流協定を32校締結

2. 地域とともに社会発展に貢献

- ・ 大学地域コンソーシアム鹿児島設立 (20)
- ・ 地域と大学のローカルシンフォニー事業開始 (20)
- ・ インフォメーションセンター設置 (21)
- ・ 広報センター整備 (21)
- ・ 鹿児島地域留学生ネットワークシステム (23)
- ・ 鹿児島大学大崎活性化センター設置 (23)
- ・ かごしまルネッサンスアカデミー焼酎マイスター養成コース開講 (24)
- ・ 稲盛アカデミー「かごしまルネッサンスアカデミー稲盛経営哲学プログラム」開講 (24)
- ・ 徳之島町とヘルシーブランド事業計画の実施に関する協定締結 (19)
- ・ 鹿児島市との包括連携に関する協定締結 (19)
- ・ 株式会社鹿児島銀行と農業経営管理システム開発事業に関する連携協定締結 (20)
- ・ 社団法人鹿児島青年会議所との包括連携に関する協定締結 (20)
- ・ 垂水市との包括連携に関する協定締結 (20)
- ・ 財団法人横浜企業経営支援財団との産学官連携に関する基本協定締結 (21)
- ・ 九州森林管理局との九州の林業再生のための必要な人材育成等に関する協定締結 (21)
- ・ 出水市との包括連携に関する協定締結 (21)
- ・ 伊仙町及び社団法人鹿児島県工業倶楽部との包括連携に関する協定締結 (21)
- ・ 鹿児島市、鹿児島経済同友会、株式会社鹿児島銀行と平川動物公園及びかごしま水族館を活かした地域活性化プロジェクト推進に係る産学官連携協定締結 (22)
- ・ 大崎ものづくり会館の施設使用に関する協定締結 (23)
- ・ 薩摩川内市と次世代エネルギーに関する協定締結 (24)
- ・ 南さつま市と南さつま市健康長寿のまちづくり推進事業に関する連携協定締結 (24)

3. 教職員の責任ある参画

- ・ 大学運営会議改変 (19)
- ・ 学長諮問会議設置 (20)
- ・ 男女共同参画推進室“muse篤姫”設置 (21)
- ・ 女性研究者支援事業本部設置 (23)
- ・ 研究支援員制度制定 (23)
- ・ メンター制度制定 (23)
- ・ 若手研究者に対する研究助成金制度制定 (19)
(22年度より若手研究者及び女性研究者に対する研究助成金制度に変更)
- ・ 若手教員海外研修支援制度制定 (21)
- ・ さくらっ子保育園開園 (20)
- ・ サバティカル制度導入 (20)
- ・ 外部評価報告書作成 (21)
- ・ 国立大学法人鹿児島大学における自己報告書作成 (24)



看板上掲式で学生スタッフとともに

ボランティア支援センター設置

平成20年7月、学生が様々なボランティアに参加し、地域との関わりを持つことで人間力を高め、学生による地域貢献・地域の活性化を図ることを目的として設置しました。学生ボランティアサークルや鹿児島県・市社会福祉協議会等とも連携・協力して学生のボランティア活動への支援を行っています。

歴史展示室設置

創立60周年記念事業の一環として、平成21年11月に中央図書館1階に設置されました。本学の源流である藩学「造士館」および医学院から現在までの歴史を紹介するとともに、第七高等学校造士館時代の幟、昭和40年代の計算尺などの資料を展示し、社会に開かれた大学として市民の皆様にも利用していただいています。



開室セレモニーでのテープカット



平成24年4月の銘板除幕式

全国初！共同獣医学部設置

平成24年度、本学9番目の学部であり、全国初となる山口大学との共同獣医学部が設置されました。獣医師の対象動物の増加、担当業務の多様化など、獣医学教育の充実が求められている社会的背景の中、山口大学と力を相互に補完しあう卓越した教育を展開し、アジア初の国際水準の獣医学教育課程をめざします。

男女共同参画推進室 “muse篤姫”設置

男女共同参画社会基本法に基づき、地域とともに社会の発展に貢献できる人材を育成・支援し男女一人ひとりがあらゆる場面において個性と能力を発揮できる大学をめざす目的で、平成21年9月に設置されました。



看板上掲式の様子



七ヶ浜ボランティアセンター内で、全国各地の大学から集まった震災ボランティアの学生たちと



震災を風化させない ～私たちにできること～

昨年、大学生協主催の東日本大震災復興支援ボランティアに多くの鹿児島大学の学生が参加しました。現地での活動の様子や、11月2日に行った報告会を通して、私たち学生ボランティアが考えたことをご紹介します。



震災当初

40名で報告会実施

去年の夏に大学生協主催の復興支援ボランティアに参加した、鹿児島大学の学生約40名により、11月2日に報告会を行いました。当時、震災から1年半が経ち、震災のことが風化しつつある現状がありました。そこで、実際に現地での活動をした学生が中心となり、メディアからではない生の声を現地の様子を知らない人に届けようという思いから報告会を実施しました。

現地での活動を振り返って

2011年3月11日、約2万人もの尊い命が失われた東日本大震災。今回、私たちが主に活動したのは日本三景松島の一角をなす宮城県「七ヶ浜町」という海のとてもしばなな町です。

メディアから得られる情報だけを目にする、復興は進んでおり、被災者の皆さんは普通の生活を送っているのではないかと思われがちです。確かに震災当初のような光景



外作業の様子

は目にすることはありませんでした。しかし、活動を通して言えることがあります。今もなおボランティアの力が必要だということです。今回、個人宅に伺い、家の中、ビニールハウスや倉庫の整理、空き地の整備のお手伝いを行いました。そこでの作業は、機械を用いることができず、手作業で瓦礫等を拾い、一つひとつモノを運びました。家の外壁には生々しい傷や地上から4、5mの場所に泥の痕が残っており、津波の恐ろしさを改めて実感したことを覚えていきます。空き地の整備を行ったときには、瓦礫の他にもぬいぐるみや衣服、カーペットや茶碗、貝殻が出てきました。その場所には元々家があって、誰かが暮らして

いた、そのことを感じることもできませんでした。また、復興が進んでいない地域では、未だ大きなモノが散乱している状況です。

集会所を中心として地元の方と話をする機会も多くありました。「目の前で若者二人から助けを請われたが、助けられる状況ではなく謝ることしかできず、次の日亡くなっていた」「子どもの目の前で父親が津波にさらわれてしまった」など、様々な話を辛そうな表情で話して下さいました。震災当初に比べると大分落ち着いてきたようですが、やはりストレスは相当なものになっているそうです。震災ボランティアと言えば外作業と思いますが、心のケア活動でも、現地の人ではない私たちだからこそ話せることもあります。また子どもと思いい切り遊ぶことで、子どものストレスの軽減や親御さんに自分の時間を持つってもらうことも可能です。

鹿児島からできること

現地で活動をし、それぞれ

感じた事や現地の方の言葉を鹿児島大学の学生に伝えるということが今回の報告会の一番の目的でした。活動を行っていく中で、何度も耳にした「震災を風化させないでほしい。まだ復興はしていないんだよ」という言葉や、普段ニュース等で耳にする「瓦礫」は、現地の人からすると「大切な思い出の品」でもあるということ。現地に行かないと考えるしなかったことや各々の思いを伝えることにより、報告会に参加して下さった誰かの行動のきっかけになればとても嬉しく思います。

被災地から遠く離れた鹿児島から考えると、今回の震災はどこか他人事になりがちです。しかし、皆さんはこのことを知っていますか？大地震で起きた津波は最大内陸5kmの地域まで到達していたことを。最高9m近い波が観測されたことを。鴨池港から鹿児島大学（郡元キャンパス）まで、およそ2kmあります。もし、鹿児島に東日本震災と同じレベルの津波が直撃したらどうなるでしょう？ 決し



報告会の様子

て、今回の震災は他人事ではありません。私たちは震災のことを知り、以後の減災に務める義務があると思います。ボランティア活動だけに意識が向きがちですが、このことも鹿児島からできることです。

現地には未だ多くのボランティアに対するニーズがあります。震災から時間が経った今、元々のボランティアがい

全てのことをボランティアの方で行うことは避けるべきだと思いますが、復興に向け被災された方と私たちが共に歩みを進めることは大切なことだと思えます。

今、私たちには被災された方たちの為に何ができるでしょうか？現地に行って何かしらの活動をしたとき、募金活動に協力をしたとき。学ぶことができなくなってしまった方たちの分もしっかりと勉学に励む。他にもいろいろな答えがあると思います。このことは震災から2年が経つ今だからこそ、もう一度しっかりと考え直さなければならぬことです。被災地から遠く離れた地からでも、できることは必ずあります。もう一度、震災のことを考えてみませんか？



原稿／西川将太（農学部生物生産学科4年）

震災ボランティアにはこれまで3度参加しましたが、活動の際、現地の方から「鹿児島に帰ってから君たちができることは何だろうね」と問いかけられたことがありました。これが報告会開催を思い立った直接のきっかけです。この記事を読んで、一人でも多くの方に被災地に関心を寄せてもらえたら嬉しいです。一人ひとりが支援のための行動を起こしてくれたら、それはまた大きな動きになるのではと期待しています。私自身も、今後は七ヶ浜町を観光で訪れ、経済的な面から少しでも応援できればと考えています。



映像を軸に、社会や世界とつながる

専門選択科目 「表象文化論演習」 担当教員…法文学部 竹内勝徳 教授

法文学部人文学科メディアと現代文化コースの2〜4年生を対象とした「表象文化論演習」は、研究・ディスカッション・発表を中心とした授業だ。1年間に渡り、グローバルな視点から小説、音楽、映像文化の表現様式を学び、近現代の文化の特質や社会の変容を見通す力を身に付けることをねらいとしている。

今年の授業テーマは「日本、鹿児島島の文化を海外へ」。学生らは1年をかけて日本や鹿児島島の文化を紹介する動画を制作。テーマ決定、取材、編集まですべてを担当し、作品は一般にも発信する。映像制作の過程で海外の学生ともディスカッションを重ね、場合によっては作品に反映させるというユニークな内容だ。授業を担当する法文学部の竹内勝徳教授は、その特徴をこう話す。「人文学科

では、学生が1年生のうちに身に付けておくべき技能を『共通技能』と名付け、『自己表現能力、コミュニケーション能力、批判的思考力、問題解決能力等』であると定義しています。演習を通じてこれらの共通技能を高め、さらに国際性の涵養という要素も加味したのが表象文化論演習です」

サンノゼ州立大学との合同授業も

平成24年度に同演習を受講するのは41人。グループごとに15分間の映像作品を制作する。前期から作品のテーマや構成を考えて夏に取材・撮影を行い、後期には編集作業や追加取材を進めつつ、米カリフォルニア州のサンノゼ州立大学日本学科との合同授業も行った。学生たちはグループ

のフリーソフト「ハンゲアウト」を利用し、サンノゼ州立大学の学生と日米の文化の違いについて、パソコン越しにプレゼンテーションやディスカッションに挑戦。映像作品をサンノゼの学生に見せて意見を聞くグループもあった。鹿大とサンノゼ州立大の学生はスカイプ名とメールアドレスを交換しているため、やる気のある学生は授業以外の時間にも交流を深めているという。「今やインターネットを使った遠隔授業は珍しくありません。大学はインターネットを使った国際的な授業を各学部のカリキュラムの中にしっかりと位置付け、継続し、それにより学生をどうレベルアップさせていくかを考えるべき時期にきていると思います」と竹内教授は、国際的な授業の重要性を強調する。

映像制作では学生の自主性を尊重

合同授業が終わると、学生らは2月上旬の上映会に向けて編集の追い込み作業に入る。竹内教授は学生の自主性やアイデアを尊重し、技術的な指導を除いて口を挟むことはほとんどない。

平成25年2月9日には完成した作品の上映会が開催された。上映された7作品は、ドキュメンタリー風に仕上げたもの、短編映画風のものなど、作品のスタイルが異なる。アニメーションやグラフィックなどのデータを活用したり、普段入れないような場所に潜入取材したりと、グループ独自の工夫も光った。上映終了後には鹿児島読売テレビのアナウンサー岡本善久さんによる講評も行われ、学生たちは

映像のプロからのアドバイスを熱心に聞き入っていた。3月には南日本放送の番組で映像作品の一つが放映されるという。

人文学科3年の黒木彩花さんは今年、2年次に引き続き表象文化論演習を受講した。「3年間多くの授業を受けてきましたが、私が後輩に最も勧めたいのがこの演習です。自分たちでテーマを決め、取材先を探し、映像をどう編集するか、1年かけて考え抜きます。それだけ苦労もありますが、受け身の授業と違って達成感が大きいです。留学せずにアメリカの大学生と交流する機会があるのも貴重です。この演習で知らない人とコミュニケーションをとる取材の面白さ、映像制作の楽しさに目覚めました。来年度も受講する予定です」と話してくれた。



映像の編集作業を行う学生たち。技術的なことは1年の時から教わっているので学生たちにとっては編集もお手のものだ



鹿児島大学法文学部人文学科 教授
竹内 勝徳

九州大学大学院文学研究科修士課程英語学英文学修了。文学修士(九州大学)。専門は19世紀アメリカ文学、批評理論、文化研究。平成4年鹿児島大学教養部講師に着任。平成16年から現職。



上映会「映像ライブ～越境しろ、映像の力。」の様子。上映された7作品のタイトルは以下のとおり。「Foreigners' Reactions ～日本アイドル編～」、「日本の就活事情」、「プリクラ～学生たちのイマドキ事情～」、「武士道とは？～現代に受け継がれる侍の魂～」、「追憶」(ショートムービー)、「ニッポンのコンカツ」(グランプリ作品)、「オタコレ～otaku collection～」

水産学部の藤枝繁教授は海を漂うごみ、「海洋ごみ」の研究者だ。

研究を始めたのは、平成9年1月に島根県隠岐島沖で発生したナホトカ号重油流出事故がきっかけ。藤枝教授は当時の水産学部生16人と共に京都府京丹後市の海岸で重油回収ボランティアとして活動し、その際、漂着した中国製や台湾製のプラスチック製品も目にした。「中国や台湾からのごみは鹿児島目の前を



吹上浜の定期調査と「ライタープロジェクト」

通って京都に流れ着く。現地ボランティア関係者から『鹿児島の海もきれいになる』と教えられたことが私が海洋ごみの研究を始めたそもそものきっかけでした」

鹿児島に戻った藤枝教授は、趣味のシーカヤック仲間と鹿児島湾沿いのごみ拾いを始めた。また、米国の環境

NGOが主催する水辺の清掃活動「国際海岸クリーンアップ」を鹿児島にも広めようと、有志と共に「かごしまクリーンアップキャンペーン」を展開。また年20回ほど、海洋ごみに関する講演も行って

水産学部水産学科 水産教員養成課程分野 教授 藤枝 繁

ふじえだ・しげる／昭和42年大阪府生まれ。平成3年鹿児島大学水産学部水産専攻科修了。博士(水産学)。熊本県立水産高等学校教諭を経て、平成4年鹿児島大学水産学部助手に着任。附属練習船かごしま丸、敬天丸航海士を併任。平成22年12月より現職。専門は漂着物学、航海学。クリーンアップかごしま事務局代表、一般社団法人JEAN理事、鹿児島県自然愛護協会理事兼事務局長、漂着物学会副会長兼事務局長。平成21年より鹿児島県海岸漂着物対策推進協議会会長、環境省・海岸漂着物対策専門家会議委員。

いる。

こうした活動の一方、藤枝教授は平成10年から月一回、吹上浜の1.6kmの区間を歩き、流出地の分かる漂着ごみを回収する定期調査を開始。平成15年からは海辺に漂着する

海洋ごみの 発生抑制の研究と 啓発活動に取り組む

水産学部の藤枝繁教授は、全国でも少ない「海洋ごみ」研究の専門家として知られる。海岸のクリーンアップキャンペーンの主催など、市民の啓発活動に努める一方、海洋ごみの調査を行い、その分析結果から海ごみの発生抑制の方法を探ろうとしている。



震災起因漂流物調査の様子と回収したプラスチック製品。かごしま丸で漁獲されたマグロの胃の中からもロープやカキ養殖に使うプラスチック製のパイプが見つかった

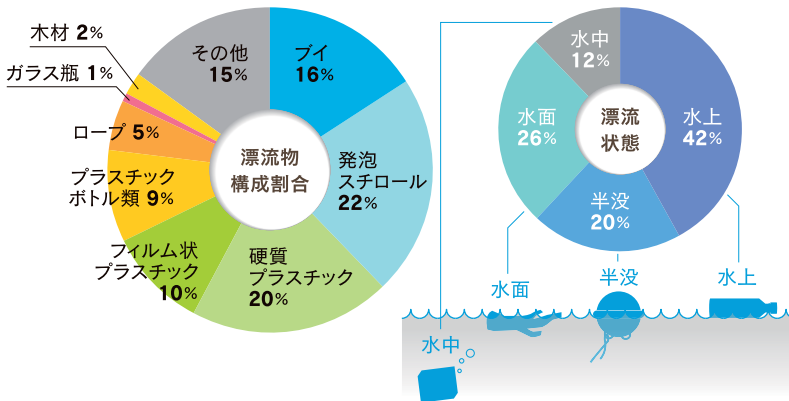
ディスプレイザブルライター（百円ライター）を収集・調査する「ライタープロジェクト」もスタートさせた。漂着物学会に所属する研究者や漂着物コレクターの協力を得て、国内外の1273海岸でライターを収集し、分析を続けている。「百円ライターは、その形状やタンクに印刷された店の名前・電話番号・住所から配布された地域が特定しやすい。その地域と拾われた場所とを結び、海洋ごみの辿る経路がわかります」

津波によって流出した震災起因漂流物の研究

平成24年からは「震災起因

と藤枝教授は説明する。他にも、瀬戸内海や伊勢湾での漂流・漂着ごみの調査や、微小ごみの調査も行ってきた。微小ごみは、養殖いけすに使用される発泡スチロール製のフロートが破片化したもの。藤枝教授は水産庁や全漁連などと協力し、フロートの処理システム構築にも尽力した。

かごしま丸による震災起因漂流物調査で判明した漂流物の構成割合と漂流状態



吹上浜での定期調査で回収した漂着物



吹上浜で収集した百円ライター。「夏には中国や台湾からの漂着物が増えます」と藤枝教授

漂流物」の研究も行って。平成23年3月11日の東北地方太平洋沖地震による津波で流出したのがれきは政府試算で500万トン。そのうちの150万トンが北太平洋を漂流していると考えられている。漂流の状況を確認しようと、全国の水産高校の実習船に協力を依頼し、藤枝教授も水産学部附属練習船・かごしま丸で調査を行った。結果、約900点の漂流物を確認し、その9割がプラスチック製品と分かった。「プラスチック

の漂流物は震災以前からあり、これら全てが震災起因漂流物とはいえませんが、被災地で使われていた漁具も見つかりました」

プラスチックは自然に分解されにくい。洋上を漂ううちに破片化し、生物の体内に入ることもある。藤枝教授はこうした破片が環境や生態系に悪影響を及ぼすのではと懸念する。「海にごみがあるとなぜいけないの、という質問を良く受けます。皆が納得する答えはまだ出ませんが、プラ

スチックに含まれる不純物が溶出する可能性があります。また、日本には海外からのごみが流れ着きますが、日本が出したごみも他所に流れ着いています。人間は海洋ごみを食べることはありませんが、生態系への影響は私たちに波及するかもしれません。人間が作って使い捨てたものが海洋ごみとなります。この問題を解決するのも人間しかできません」

やりたいことは やったほうがいい

東京医科大学の中島利博教授は、力一杯走り続ける人だ。遊びでも仕事でも、その時やりたいことにあらん限りの情熱を注いできた。「人間はすぐ年を取るから、やりたいことはできる時にやった方がいいんです」。小児科の看護師長だった母親の影響で、幼い頃から医者をめざした。野口英世の伝記に夢中になり、研究者にも憧れた。釣りが好きで高校3年の夏休みにも真っ黒に日焼けするほど遊んでいたが、受験3カ月前は「死ぬ気」で勉強し、鹿大医学部に合格。入学後は再び遊びに夢中の毎日だったが、専門科目を学ぶ3年生から大学が楽しくなったという。「園田俊郎先生のウイルス学教室での実験が面白くて。毎日、夜中までやっています」。6年生で学生結婚。生活費を稼ぐため、国家試験の前日ま



1994年頃、ソーク研究所時代の中島教授(右)

でアルバイトをしながら、国家試験にも見事合格を果たした。

研究で世界を牽引 国際貢献活動も

第三内科(納光弘先生)での研修医時代は鹿児島大学病院でATL(成人T細胞白血病)などの臨床をしながら、HTLV-1ウイルスの研究にも携わった。「病院に40日以上泊まり込んで仕事したことも。大病院にいたからこそ稀な症例を数多く診て、勉強することができました」。

研修医2年目には、同ウィルスと関節リウマチ(RA)の関連について、丸山征郎先生らと最初の論文を発表した。

90年代には活躍の場をアメリカに移す。92年には最先端の生物医学系研究所として知られるソーク研究所に留学。94年にはハーバード大の教員に就任した。この間、真核細胞の遺伝子発現システムを説明する「転写統合装置」という概念を提唱し、その実証にも成功した。この成果はセル誌やネイチャー誌に掲載され、論文引用数は一五〇〇回にも上る。

90年代はこの分野で世界を牽引する成果を挙げた中島教授は帰国後、「必要とされているのに、人がまだ手を付けていない分野の研究を」と考え、再びRA研究に従事。RAの発症に深く関わる新規分子「シノビオリン」を発見し、ここから世界のRA研究を大きく展開させた。現在、中島教授はシノビオリンの新たな可能性に関する研究を行っており、その成果の公表が待たれる。

これだけ研究に打ち込みながら、国際貢献にも意欲的なのが中島教授のすごいところだ。2006年にキルギス共和国を訪れた中島教授は、子どものリウマチ熱の発生が日本の千倍もある事実を知る。「ショックでした。抗生剤さえ飲めば治るリウマチ熱を放っていたことなどが原因で、心疾患で亡くなる人が非常に多い。今現状を変えなければ、30年先も状況は変わりませんから、見て見ぬふりはできないと思いました」。医療教育向上の必要性を感じた中島教授は、キルギスの若手医師を日本に招いて治療法や予防法を伝える一方、有志を集めて寄付を募り、医療支援を行った。08年には保健相直属の国家顧問にも就任し、医療政策の策定にも参画している。



2008年、高知でブルーマーリンを釣り上げた中島教授。体長3m15cm、体重150kgの大自然でその年の四国チャンピオンとなった



2013年2月末、キルギス共和国大統領夫人と

中島教授の夢は新薬をつくり、その利益で、日本に研究所をつくることだ。「大きな目標をもって、面白いことを突き詰めていきたいですね。研究では、芸術のように想像力を爆発させることもできる。競争という厳しい面もあるけど、こんなに楽しいことはないとも思っています」

研究者

中島利博

医学部卒業



なかじま・としひろ / 1964年鹿児島県生まれ。鹿児島県立国分高等学校卒業。89年鹿児島大学医学部医学科卒業後、同第三内科入局、聖マリアンナ医科大学を経て、92年鹿児島大学医学部助手。94年米ソーク研究所留学。97年ハーバード大学医学部インストラクター。帰国後は聖マリアンナ医科大学大難病治療研究センター教授・副センター長などを経て2010年より現職。聖マリアンナ医科大学と大阪工業大学の客員教授も務める。08年キルギス共和国国家顧問就任。NPO法人「シルクロードの健康的な未来を考える会」理事長。趣味は高知県の海でのカンキマグロ（ブルーマーリン）のトロリング。



実験室でアナログ伝送の評価を議論する4年生と福島教授

アナログデータを

伝送する

RLCの開発

〜日本マルコ株式会社との連携〜

光通信技術を活用してデジタルデータを伝送する「非接触伝送コネクタ」(RLC II ロータリーリンクコネクタ)を改造し、アナログデータの伝送を可能にしようという研究が進んでいる。実用化されれば、とりわけ高品質・高信頼性が求められる分野を中心に、さまざまな用途への応用が期待される。

鹿児島大学は現在、日本マルコ株式会社(本社・神奈川県横浜市)と連携し、アナログデータを伝送する非接触伝送コネクタ(商品名:ロータリーリンクコネクタ・以下、RLC)の開発を進めている。RLCは日本マルコの独自製品。全方向監視カメラなどの回転部のある機器が有線でデータを伝送するとすると可動範囲が制限される。そのため、回転側と固定側の間を非接触にし、光通信でデジタルデータを伝送する。データだけでなく、機器の稼動に必要な電力も送電可能だ。接点部がないため、摩擦による寿命ロス、ノイズ、金属粉塵がなく、定期的メンテナンスが不要。また、ケーブルフリーのため機器の可動範囲も無制限と、多くの利点がある。そのため、過酷な環境に耐えながらも高い品質と信頼性が求められる航空・宇宙などの分野での需要が高い。

デジタルからアナログへ

現在商品化されているRLCが送れるのはデジタルデー

タだが、今回の共同研究ではアナログデータを伝送するRLCの開発をめざしている。大学院理工学研究科の福島誠治教授は、無数の表現形式をもつアナログデータの伝送が可能となる通信方式と簡単な回路を考案、それを基に日本マルコ側でRLCを試作するという作業を繰り返し、実用化に近づけていく予定だ。

NTTフォトリクス研究所に25年勤め、光回線終端装置(ONU)の開発に携わった福島教授はこう語る。「ONUは光通信でデジタルデータの送受信とアナログデータの受信を行うもので、RLCと基本構造が似ていますから、これまでの経験が活かせると思っています。研究の手法はいろいろありますが、まずは他分野で既に使用されているアナログ的な手法を通信に応用することから始めようとしています」。日本マルコの藤等司取締役・技術部部长は「これまではアナログデータをデジタルデータに変換して伝送していましたが、クライアントからは『アナログデータをそのまま送れるRLCが欲しい』とのご要望を頂いて

いました。光通信に精通する福島教授と共同研究を行い、実用化に弾みをつけたいですね」と期待を高めている。

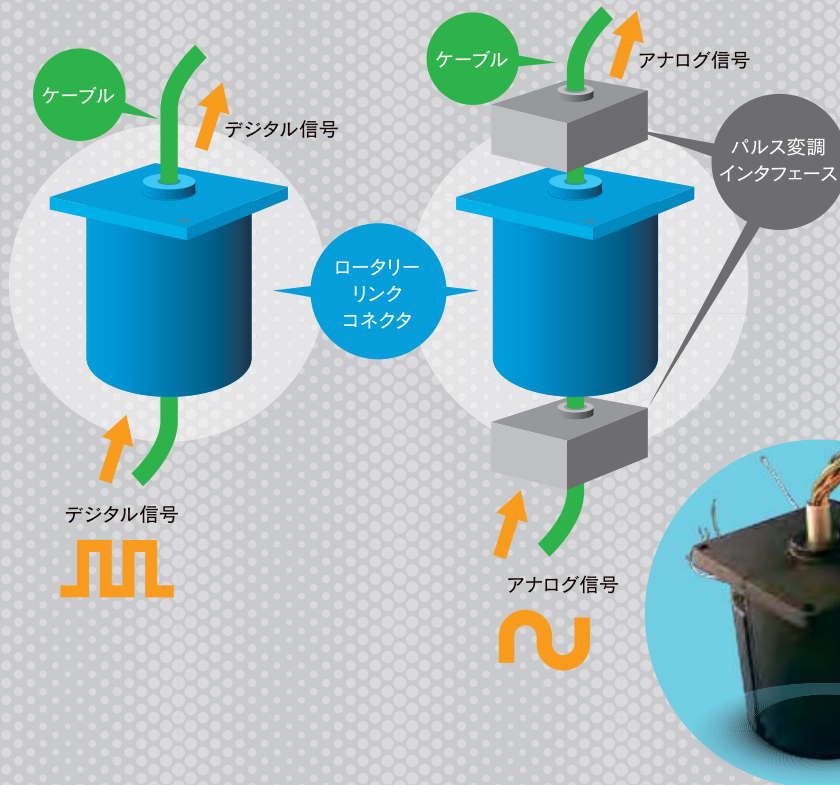
アナログのRLCで広がる世界

アナログのRLCが実用化されれば、宇宙・航空・防衛・ロボット・医療といった高品質・高信頼性が求められる分野で活躍することは間違いなだろう。また福島教授は、アナログのRLCを使えば古い規格をもつ記録媒体「レガシー・メディア」を引き続き活用することもできると語る。

「例えば、自治体にあるアナログ方式の防災監視システムをデジタルに更改するには莫大な費用がかかりますが、アナログのRLCがあれば昔からのシステムを大事に使い続けることができます。また、アナログデータはデジタルより情報量が格段に多いので、アナログレコードにRLCを活用できれば、面白い世界が広がるかもしれないと考えています。将来は人工衛星にもRLCを搭載するような夢もかなえたいですね」

<デジタル・ロータリーリンクコネクタ>

<アナログ・ロータリーリンクコネクタ>



デジタルデータを伝送する日本マルコのロータリーリンクコネクタ



藤 等司
日本マルコ(株) 取締役・技術部 部長

企業の声



わが社は創業以来、航空・防衛・宇宙分野に特化した部品を製造・販売してきました。5年前に与論に工場を構えたこともあり、鹿大と共同研究ができないかと考えていたところ、鹿児島県庁にご紹介いただいたことがきっかけで鹿大とのお付き合いが始まりました。光通信の専門家である福島教授から、アナログデータの伝送は理論的にできるはずとの頼もしいお言葉を頂き、非常に期待しているところです。アナログデータは汎用性が高いのでRLCの実用化によって応用分野が広がり、RLCの販路も広がっていくのではないかと期待しています。

鹿大の声
福島誠治
理工学研究科教授



アナログデータの伝送は理論的には可能です。まずはレーザー光の特性を把握してアナログの要素を取り入れた通信方式を考えたいと思います。めどがみついたら、簡単な回路まで学生たちと一緒に作る予定です。今は少子化で大学という産業が縮小しつつある時代。大学が置かれている現状を考えれば、今後、大学はもっと研究成果を外部に発信し、社会貢献にしていけるべきですし、自分自身、いろいろな企業との研究に取り組んでいきたいと考えています。学生も、大学にいるうちに企業の方々と一緒に仕事をして、外の世界に目を向けてほしいですね。

I 学生表彰 (平成24年度)

A 進取の精神学生表彰

平成23年度から、学生憲章の趣旨に即し、困難な課題に果敢に挑戦する「進取の精神」を実践し、優れた活動実績や業績等を取めた学生及び学生団体を表彰します。



	団体名	理由等
優秀賞	Sustainable Campus Project (SCP)	生ごみの循環システムの構築活動
	農トレ	合鴨農法による棚田の保全活動

B 学長表彰

学業や課外活動において優秀な成績をおさめた個人・団体に対し学長表彰が行われます。

被表彰者	表彰理由
折橋 広樹 (理工学研究科博士前期課程2年)	第15回(2011年)応用物理学会九州支部 学術講演会発表奨励賞(平成23年11月27日)
久徳 貢大 (理工学研究科博士前期課程2年)	平成23年度土木学会西部支部研究発表会 優秀講演賞(平成24年3月3日)
山下 啓 (理工学研究科博士後期課程2年)	平成23年度土木学会西部支部研究発表会 優秀講演賞(平成24年3月3日)
江口 康平 (理工学研究科博士後期課程2年)	2011年度日本コンクリート工学会 九州支部長賞(平成24年3月23日)
チーム名 鹿児島大学K-MEN 江藤 翔太郎、小出 凪人 前田 祥良、前田 真徳 (理学部物理科学科2年)	第8回種子島ロケットコンテスト ベイロード部門 (Can Satクラス) ・優勝 ・日本エアリキード賞(企業賞)(平成24年3月10日)
井戸川 祐樹 (理工学研究科博士前期課程2年)	International Workshop on Highly Efficient Accelerators and Reconfigurable Technologies FPGA design contest 2012 -Connect6 Revenge- Finalist Awards (FPGAデザインコンテスト入賞)(平成24年5月30日~6月1日)
沖田 裕介 (理工学研究科博士前期課程2年)	IASS Annual Symposium IASS-APCS 2012 10th IASS Hangai Prize[若手研究者論文賞](平成24年5月24日)
増田 雄太 (工学部機械工学科4年)	ISAEM-2012 and AMDI-3 Best poster award(平成24年11月7日)
井ノ上 桃子 坂元 里菜 (工学部情報システム工学科4年)	HCGシンポジウム2012 学生優秀インタラクティブ発表賞(平成24年12月12日)
亀田 晃一 (人文社会科学部研究科博士後期3年)	土砂災害への警戒の呼びかけに関する検討会 委員委嘱(平成24年7月4日) 第10回法政大学「地域政策研究賞」 奨励賞(平成24年11月30日)
正入来 未来 (理工学研究科博士前期課程1年)	第49回化学関連支部合同九州大会ポスターセッション 優秀ポスター賞(平成24年12月7日)
荒毛 知幸 (理工学研究科博士前期課程1年)	日本化学会低次元系光機能材料研究会兼西日本ナノシート研究会 優秀ポスター賞(平成24年7月8日)
今古川 博恵、上杉 加奈子 大木 悟志 (理工学研究科博士前期課程2年)	第23回九州地区若手ケミカルエンジニア討論会 優秀ポスター賞(平成24年7月21日)
柳原 正宗 (理工学研究科博士前期課程1年)	化学工学会第44回秋季大会 優秀ポスター賞(平成24年9月20日)
上戸 龍 (理工学研究科博士前期課程2年)	日本エネルギー学会第49回石炭科学会議 優秀賞(平成24年10月24日)
松村 彰洋 (理工学研究科博士前期課程2年)	化学工学会九州支部学生賞審査会 学生賞(平成24年11月15日)
沖田 裕介 (理工学研究科博士前期課程2年)	日本建築学会構造形態の解析と創生2012 優秀講演(平成24年11月3日)
永田 洸大、佐々木 亜衣 沖田 裕介、土持 拳 (理工学研究科博士前期課程2年)	日本建築学会構造形態の解析と創生2012 形態創生コンテスト2012 入選作品(平成24年10月25日)
野村 晋太郎 (理工学研究科博士前期課程2年)	Kyoto International Symposium on Biodegradable and Biobased Polymers ポスター賞(平成24年12月9~10日)
川畑 壮大朗 (理工学研究科博士前期課程2年)	日本ペプチド学会 第49回ペプチド討論会 ポスター賞(平成24年11月8日)
ジャンスボルシスラボール (理工学研究科博士後期課程3年)	第72回分析化学討論会スターセッション 櫻島賞【若手ポスター賞】(平成24年5月19日)
谷口 裕斗、野妻 彩美 (教育学部生涯教育総合課程 健康教育コース4年) 田中 啓寛 (工学部環境化学プロセス工学科4年)	課外活動共用施設での窃盗犯逮捕に貢献 事件日 平成24年11月15日 警察署感謝状 平成24年12月18日
大島 仁 (工学部情報システム工学科3年)	2012年度JTUTライアスロンエイジ別ランキング 男子24歳以下第1位
福元 和真 (工学部情報システム工学科4年)	第11回ITSシンポジウム2012 優秀論文賞(平成24年12月13日)
唐鎌 寛崇 (理工学研究科博士前期課程1年)	電気関係学会九州支部連合大会 電気学会優秀論文発表賞(平成25年2月1日)
小池 賢太郎 (理工学研究科博士前期課程2年)	土木学会平成24年度全国大会第67回年次学術講演会 優秀講演者(平成24年11月10日)
春森 浩平 (理工学研究科博士前期課程1年)	第4回半導体・材料デバイスフォーラム ポスター発表優秀賞(平成24年11月23日)
富永 晃好 (連合農学研究科博士後期課程3年)	第3回(平成24年度)日本学術振興会 育志賞(決定日 平成25年1月11日)(授賞式 平成25年3月4日)
上原 沢子 (医歯学総合研究科博士課程4年)	第71回日本矯正歯科学会大会 学術大会優秀発表賞(平成24年9月28日) 第5回口腔先端科学教育研究センター歯系大学院生研究発表会 最優秀賞(平成24年12月15日)
村上 大輔 (医歯学総合研究科博士課程2年)	第50回日本小児歯科学会大会 優秀発表賞(平成24年5月13日)
古川 直樹 (理工学研究科博士前期課程2年)	The 14th International Symposium on Eco-materials Processing and Design (ISEPD2013) Best poster award(平成25年1月16日)

C 鹿児島大学稲盛賞 (平成15年度～)

本学を卒業された京セラ株式会社名誉会長 稲盛和夫氏のご寄附による学生表彰制度で、①学業に専念し成績優秀で品行方正な最終年次の学生、②社会の期待にこたえるような業績を挙げた学生、③その他同等以上の表彰に値する行為等があったと認められる学部学生及び大学院学生を表彰するものです。

学部	学科・課程		受賞者	学部	学科・課程		受賞者
法文学部	経済情報学科	4年	出原 由紀恵	工学部	電気電子工学科	4年	帖地 宏典
	人文学科	4年	大重 千里		機械工学科	4年	田畑 亮
教育学部	学校教育教員養成課程	4年	木下 峻介	農学部	生物環境学科	4年	本田 廉人
理学部	数理情報科学科	4年	下園 哲弘		生物生産学科	4年	西村 康伸
	地球環境科学科	4年	石貫 泰三	水産学部	水産学科	4年	田原 美咲
医学部	医学科	6年	飯嶋 真秀			4年	佐田 萌
	保健学科	4年	本村 礼那	大学院	専攻	受賞者	
歯学部	歯学科	6年	池水 智美	教育学研究科	芸術・スポーツ系専攻	2年	山下 洋平

D 鹿児島大学工業倶楽部賞 (平成17年度～)

社団法人鹿児島県工業倶楽部との包括連携協力協定の目的に基づき設けられた学生表彰制度で、鹿児島県地域産業の発展に貢献する優秀な研究業績等を挙げた大学院研究科に在学する最終年次の学生を表彰するものです。

理工学研究科博士前期課程	2年	折橋 広樹
農学研究科(修士課程)	2年	徳永 悠

II 奨学金・授業料免除等 (平成24年度)

A 大学独自の経済支援制度

1 学業成績優秀学生奨学金 (平成23年度より)

学生の勉学意欲の向上及び優秀な人材の輩出などを目的に、平成23年度に創設しました。対象者(外国人留学生を含む)は学部の全学年であり、在籍中の成績評価により奨学金を支給します。学部学生85人に年額15万円の奨学金を給付しました。

法文学部	16人	工学部	18人
教育学部	11人	農学部	8人
理学部	8人	水産学部	6人
医学部	12人	共同獣医学部	2人
歯学部	4人		
合計		85人	

2 大学院メディポリス教育振興基金による授業料免除 (後期授業料) (平成23年度より)

大学院に在籍する学生の修学・研究環境の向上等を図ることを目的として、財団法人メディポリス医学研究財団からの寄附金を原資として平成23年度に設立し、学業、人物ともに優れ、経済的支援を必要とする者(外国人留学生を含む)35人に対して授業料免除(年間授業料の半額)を行いました。

修士課程(博士前期)		博士課程(博士後期)又は専門職学位課程	
研究科名	人数	研究科名	人数
人文社会科学研究科	2	人文社会科学研究科	1
教育学研究科	2	保健学研究科	1
保健学研究科	1	理工学研究科	2
理工学研究科	12	医歯学総合研究科	5
農学研究科	3	臨床心理学研究科	1
水産学研究科	2	連合農学研究科	2
医歯学総合研究科	1	合計	12
合計	23		

3 種村奨学金 (平成22年度より)

本学名誉教授で元教育学生担当理事の種村完司氏からの寄附金を原資として、本学に在籍するアジア諸国からの私費外国人留学生を支援するため、平成22年度に設立されました。今年度は4人の私費外国人留学生に20万円を支給しました。

農学部 1(韓国)	医学部 1(中国)	人文社会科学研究科 2(中国)
-----------	-----------	-----------------

4 ボランティア支援センターの学生支援 (平成23年度より)

災害ボランティア活動を行う学生に対する経済的支援として平成23年11月24日に「鹿児島大学災害ボランティア活動支援事業実施要項」を定め、災害ボランティア活動費の一部助成を行う制度を構築しました。同制度により、平成23年3月11日に発生した東日本大震災の復興地で様々な支援活動を行った学生131人に対して活動費の助成を行いました。

B 国等の経済支援制度

1 授業料免除

		学部・研究科	司法政策	博士後期
前期	全額免除	501人	4人	43人
	半額免除	517人	5人	45人
後期	全額免除	497人	3人	37人
	半額免除	546人	4人	41人

2 奨学生

	日本学生支援機構	各種団体体育英会	計
学部	4,534人	137人	4,671人
大学院(修士・博士前期)	273人	15人	288人
大学院(博士・博士後期)	58人	7人	65人
大学院(専門職)	27人		27人
合計	4,892人	159人	5,051人

Ⅲ 学生及び若手教員への海外派遣支援等 (平成24年度)

A 鹿児島大学学生海外研修支援事業 (平成22年度から学長裁量経費により旅費を支援)

大学憲章に基づき、自主自律と進取の精神を併せ持ち、かつ社会の発展に貢献し、国際社会で活躍できる人材育成を図るため、学生の海外研修を支援しました。

部局	プログラム名	研修先(国名)	参加者	部局	プログラム名	研修先(国名)	参加者
教育センター	鹿児島大学砂漠緑化研修プログラム	中国	11	法文学部	海外短期留学1	アメリカ	11
	南米における進取の気風研修計画	ブラジル・パラグアイ	14		フィールド学実習(文化人類学)	マレーシア	9
	海外研修基礎コースinカリフォルニア	アメリカ	21	教育学部	国際理解教育調査研究I	韓国	11
	海外研修基礎コースinカナダ・アルバータ	カナダ	17	医学部	看護教育学	韓国	4
	共生のためのフェアトレードII(海外実践編)	中国・内モンゴル	7	農学研究科	国際協力農業体験講座特論	ドイツ	7
	国際人に求められる資質育成の実践	タイ	13	農学部	臨床獣医学特別研修	アメリカ	3
		中国	10	水産学研究科	Advanced Lecture on Tropical Fisheries	フィリピン	8
	海外研修基礎コースinハワイ	アメリカ(ハワイ)	12	北米教育研究センター	国際プロフェッショナル養成プログラム	アメリカ	7
	海外研修基礎コースinシンガポール	シンガポール	13				
海外研修基礎コースin香港	中国(香港・深圳)	3	合計		181		

B 協定校への学生留学への支援事業 (平成23年度から学長裁量経費により旅費を支援)

部局	派遣大学	留学先(国名)	人数	部局	派遣大学	留学先(国名)	人数
法文学部	カセサート大学	タイ	1	教育学部	山東師範大学外国語学院	中国	2
	ミュンヘン大学	ドイツ	2		湘潭大学	中国	1
	レンヌ第2オート・ブリュターニユ大学	フランス	1	教育学部	ボン大学	ドイツ	1
	釜慶大学校	韓国	1		江原大学校	韓国	1
	釜山大学校	韓国	1		淡江大学	台湾	1
	江陵原州大学校	韓国	1	合計		13	

C 鹿児島大学若手教員海外研修支援事業 (平成21年度から学長裁量経費により旅費・滞在費を支援)

次世代を担う若手教員の海外の教育研究機関における研修を支援することにより教育研究能力等の向上を図り、本学の教育研究の国際的通用性・共通性の向上に資することを目的として設立されました。

部局	人数	研修先(国名)	研修題目
教育学部	2	フランス	在欧州日本古典籍の調査およびヨーロッパにおける古典教育の現状把握とその活用
		アメリカ	テクノロジーリテラシー教育の調査と人的ネットワークの構築(※北米教育研究センター募集分)
医学部	1	アメリカ	①学部および大学院教育における小児看護・看護倫理領域の国際的通用性・共通性のある教授能力の向上 ②博士論文の継続研究「小児がんの子どもへの病名病状説明に対して親が抱く不確かさへのアクションリーチ」に関する研究手法の獲得
水産学部	1	スペイン/アメリカ	生化学物質を使った動物プランクトン生産力の定量的測定法に関する研究
理工学研究科(理学系)	1	イギリス	ボルネオ産植物標本の調査
理工学研究科(工学系)	1	アメリカ	飽和や不感帯を有するむだ時間システムに対する最適制御
歯学総合研究科(医学系)	1	ドイツ	法医解剖・法医実務の研究に関して多面的な分野からの知識・技術の習得(※平成23年度からの継続支援)
臨床心理学研究科	1	スウェーデン	①マウスを用いた神経因性疼痛モデルの行動評価(慢性疼痛の基礎研究) ②慢性疼痛への心理学的介入モデルとしてのSelf-control理論の国際比較(慢性疼痛の臨床研究)
医学部・歯学部附属病院	2	スイス	天然歯およびインプラント周囲の骨欠損における各種生体材料および治療法の効果に関する研究(※平成23年度からの継続支援)
		イギリス	①医学教育の理論と実践に関する研究およびその歯科医学教育へ応用 ②世界医学教育連盟のグローバルスタンダードから鑑みる歯科医学教育のグローバルスタンダード
国際連携推進センター	1	イギリス	国際開発研究、グローバル・スタディーズ
合計	11		

水産学部附属練習船かごしま丸の竣工

平成24年3月30日、水産学部附属練習船第四代かごしま丸が竣工し、母港の谷山港で竣工披露式等が開催されました。かごしま丸は、全長66.92m、1,284トン（国際トン数）、最大速力13.65ノットで72名の搭乗が可能な次世代型練習船です。竣工披露式には、文部科学省及び関係省庁、鹿児島県水産に関わる他大学関係者並びに本学関係者など約150名が参加しました。吉田浩己学長から挨拶の後、来賓の奈良人司文部科学省大臣官房審議官及び伊藤祐一郎鹿児島県知事（坂口弘行商工労働水産部次長が代読）からそれぞれ祝辞が述べられました。

かごしま丸は、最新鋭の装備を有し、風浪下でも安全で確実な観測・実験等を行えるよう特殊操船性能（定点保持やその場回頭、横・斜め移動等が可能）を基本コンセ

プトとしています。第三代かごしま丸のときに、「熱帯・亜熱帯水域での洋上教育拠点」として教育関係共同利用拠点の認定を受けており、第四代かごしま丸もこれを継承していきます。



右から奈良人司文部科学省大臣官房審議官、吉田浩己学長、坂口弘行商工労働水産部次長

学長一行によるブラジル訪問

南米実習（学生海外短期研修）の実習対象候補地の拡大と、アマゾン地区の大学間学術交流・共同研究の可能性を探ることを目的として、吉田浩己学長、前田芳實研究担当理事外2名によるブラジル訪問が実施されました。アマゾナス連邦農業大学（UFRA）を訪問し、日系2世の沼澤学長とブラジル政府の「国境なき科学」プロジェクトの制度などを活用して、熱帯農業や病害虫対策、アマゾンの淡水魚養殖についてなど、本学との教員・学生間の学術交流が可能であることを確認しました。また、本年度の南米実習に参加した本学学生14名ともサンパウロで合流し、ブラジル鹿児島大学同窓会に出席して、意見交換等を行いました。

南米実習を通して気風に則ったグローバル人材教育の実現が期待され、今後ともブラジルとの交流を継続して実施していきます。



実習参加学生と本学一行及びブラジル鹿児島大学同窓会の皆さん

埋蔵文化財調査センター、 鹿児島県初出の小畦によって 区切られた古墳時代の水田跡と 住居跡群、河川跡を検出

埋蔵文化財調査センターでは、平成24年5月より郡元キャンパス学習交流プラザ等の建設に伴う発掘調査を行いました。その結果、縄文時代から中世にわたる各時代の埋蔵文化財を確認し、河川跡と古墳時代の住居跡群や水田跡が検出されました。

今回の調査成果で、上下に重なる2層の水田跡が確認でき、水路から出土した土器等から2層とも古墳時代のものであると推定されます。特に小畦跡は良好な状態で検出され、古墳時代の稲作農耕南限地域の様相を知る上で、重要な遺構といえ、小畦で区切られた1枚の水田の大きさが判明するものとしては、県内初出です。古墳時代後期の住居跡群も確認され、河川跡と水田跡と居住域が同時に検出されたことにより、河川のほとりに営まれた古墳時代のムラの景観が復元できました。



山口大学及び鹿児島大学の共同獣医学部による「獣医学概論」共同実施

山口大学共同獣医学部及び鹿児島大学共同獣医学部は、平成24年8月29日から9月5日にかけて「獣医学概論A」及び「獣医学概論B」を共同実施しました。「獣医学概論A」は、8月29日から3日間、山口大学において、「獣医学概論B」は、9月3日から3日間、鹿児島大学において実施されました。「獣医学概論」は、様々な職域の獣医師や教員が、獣医師の社会的役割や獣医学の歴史などを教授する集中講義です。

普段の講義は、同じ授業科目を同じシラバス・時間割に従って遠隔授業システムの画面を通じて受講しており、両大学の学生にとって今回初めての直接の顔合わせとなりました。プログラム終了後には、学生間で再

会の約束を交わす様子が多々見受けられ、同じ教育課程を通して共に学ぶ者としての一体感が生まれていました。

今後、高学年時に同様の集中実習も予定しており、鹿児島大学においては「産業動物診断治療学実習II」を、山口大学においては「動物感染症総合実習」を開講予定です。



山口大学で両大学学生と山口大学共同獣医学部教員との集合写真

九州防災シンポジウムin鹿児島 — 火山災害・豪雨災害を考える —

国立大学協会や国立大学協会九州支部会議、本学との共催で防災シンポジウムを開催し、一般市民や学生ら250名が参加しました。

吉田浩己学長は「防災意識をより高め、本学と地域が継続して防災について考えていく機会としたい」と述べ、続いて、伊藤祐一郎鹿児島県知事（丹下甲一副知事代読）から「防災強化は県の課題です。本シンポジウムが県民の意識向上に貢献することを期待します」と挨拶がありました。

シンポジウムでは、京都大学防災研究所火山活動研究センターの井口正人教授から桜島の噴火活動の歴史と現在の活動の解説がありました。ほかにも奄美豪雨災害の概要を説明し、「減災のためのシナリオが必要」などの指摘がありました。パネルディスカッションでは、防災力向上について総合討論が行われ、聴衆者から「防災マップ上指標の実地への表示について」などの質問や意見が出されました。



京都大学防災研究所火山活動研究センター
井口正人教授の講演

国際協力体験2講座の 帰国報告会を開催

農学部では「国際協力体験講座」・「国際協力農業体験講座」に参加した30人の学生の帰国報告会を開催しました。

同講座は、国際協力に関心を持つ学生が、国際協力が行われているアジアの現場に赴き、現地の人々との交流・現場視察・農業体験を行うもので、8月～9月にかけて、タイ・ベトナム・ミャンマーの3コースで各11日間の渡航実習が実施されました。

コース毎に、住民や学生との交流・意見交換の様子や農業体験、異文化体験の報告があり、「歩み寄りや相互理解の大切さ」などが語られました。ミャンマーコースの発表では、国際協力賛成派と反対派に分かれて議論を行い、学生一人ひとりが体験をもとに国際協力について深く考えたことがうかがえました。





購入した学生とフェアを企画した学生たち

入来牧場牛肉フェア開催

農学部附属農場入来牧場で育てられた黒毛和牛を使い、郡元キャンパスの中央食堂で「スタミナカレー入来スペシャル（150食・380円）」と「肉うどん入来スペシャル（50食・280円）」の販売が11月6～8日の3日間行われました。「鹿大産の牛肉を学生のみなさんに食べてほしい」と、実習などで飼育した農学部の学生が中心となって企画したものです。

牛肉はカレーやうどんに多目に盛られており数量限定ということもあって、昼前から列ができていました。購入した学生たちは「おいしい」と満足そうに食べていました。農場前では、ヒレスステーキやバラスライスなどの牛肉を市価より安く販売。近隣の住人や学生などが一人2パックの限定で購入していきましました。一人暮らしの学生は「普段牛肉は買えないのでうれしい」と話していました。

2億1500万年前の地層から 巨大隕石衝突の証拠を発見

大学院理工学研究科（理学系）の尾上哲治助教、東北大学、茨城大学、首都大学東京、日本原子力研究開発機構らの研究グループは、岐阜県坂祝（さかほぎ）町の木曾川河床から採取された岩石試料を分析し、今から約2億1500万年前の三畳紀後期という時代に巨大な隕石衝突が起こった証拠を発見しました。

三畳紀後期にはいくつかの生物絶滅イベントが知られており、その原因の一つとして隕石衝突が考えられてきましたが、これまで20年以上研究されたにも関わらず証拠が不明でした。木曾川河床の粘土層から、隕石衝突により形成されたと考えられる直径1mm以下の球状粒子を発見し、微小な化石も含まれていたため、隕石衝突が起こった時代の割り出しに成功しました。本研究で、隕石衝突の明らかな証拠を世界で初めて見出したこととなり、生物大量絶滅との関連性の解明に期待が持てます。



隕石衝突が記録された粘土層の写真。
岐阜県坂祝町の木曾川右岸河床

女子中高生のための鹿大科学体験塾 ～理系女子（リケジョ）ってカッコいい～を開催

男女共同参画推進センターでは、「女子中高生のための鹿大科学体験塾～理系女子（リケジョ）ってカッコいい～」を11月11～24日の期間で開催しました。理工系に進む女子が少ない現状を踏まえ、女子中高生を対象に理工系学部が科学実験や女子大学院生との交流機会を提供して理工系への関心を持ってもらおうと企画したものです。

理工系5学部10コースに計約90人の女子中高生が参加しました。理学部では金や銀のナノ粒子を作ってミクロの世界を観察。工学部では、女性建築家と生活空間を設計し、目の錯視がファッションなどにどう応用さ

れるかを体験しました。共同獣医学部ではウマ・ウシ・ブタの観察や飼育・診療を体験しました。女子中高生から「今まで学んだことのないことに挑戦できて刺激になった」などの声が聞かれました。



共同獣医学部で子牛に聴診器をあてて診察を体験

法文学部「大学生による小学校出前授業」

法文学部の3つのゼミの学生が宮川小学校（鹿児島市皇徳寺台）に出向き、出前授業を小学校5・6年生の3クラスで行いました。この活動は、ゼミで取り組んでいる研究を社会と接点を持ちながら研究する意義を理解し、他者へ伝えるスキルを身に付けることが目的です。学生たちはスライドを使ったり、子どもたちとグループディスカッションに参加してアドバイスを رفتりして活気ある授業となりました。

各ゼミの学生は「火山灰と行政の役割」「法（ルール）の目的と役割」「身近に潜む危険を感じ取ろう～社会学の観点から」というテーマで授業を行い、法律学や社会学など普段

学生たちが学んでいる専門知識をわかりやすく身近なテーマに置き換えて教えていました。児童からは「普段考えたこともなかった」との意見が多く聞かれ、学生たちの授業に大変興味を持ったようでした。



「法の目的と役割」として事故について話す「商法ゼミ」の学生

文部科学省「情報ひろば」で宇宙関連の企画展示を実施

旧文部省庁舎3階にある「情報ひろば」において、大学における研究成果を発表する展示企画を文部科学省と本学の共同で1月7日～3月17日まで実施しました。テーマは「地域とともに宇宙に挑む～鹿児島大学の宇宙研究と県内企業との取組～」です。

本学には宇宙に関する2つの講座があり、それぞれの講座から「宇宙を拓く」「宇宙を測る」「宇宙を活かす」の3パートに分けて展示。理工学研究科宇宙コースが地元企業と共同で開発した超小型人工衛星「ハヤト」の電波受信に成功したアンテナの展示や3Dテレビで国立天文台と共同で行っている天の川銀河の立体地図を作成する様子などを紹介しました。また、地元焼酎メーカー12社の協力を得て製造した12本の「宇宙だより」は、国際宇宙ステーションに約10日間滞在させた麴と酵母を使った焼酎です。



「情報ひろば」での展示の様子

鹿児島大学樟寿会

平成24年11月17日に第10回「鹿児島大学樟寿会」総会・懇親会をホテルパレスイン鹿児島で開催しました。樟寿会は鹿児島大学を退職された名誉教授の方々の集まりです。昭和56年に設立され、毎年1回親睦会を催していましたが、一時期その活動を停止していました。平成15年8月、故・石神兼文元学長を中心に各学部の有志が集まり、会の再興が協議されました。会の名称を「鹿児島大学樟寿会」とし、新たに会則を制定して再発足。平成15年に第1回「鹿児島大学樟寿会」総会・懇親会を開催しました。

現在218名の方が登録されており、毎年秋に鹿児島市で総会・懇親会を開催し、多数の参加のもと、会員相互の親交を深めています。顧問である学長が鹿児島大学の近況などを報告するとともに、OB教員でもある会員の方から助言をいただいています。



昨年の懇親会



鹿児島における小規模小学校の課題 —複式学級の可能性を考える

鹿児島大学教育学部教育心理学専攻

假屋園 昭彦 教授



教育学部附属小学校1・2年生の複式学級



教育学部附属小学校3・4年生の複式学級

かりやその・あきひこ／

昭和36年大分県生まれ。平成7年広島大学大学院教育学研究科博士後期課程教育心理学専攻修了。博士（心理学）。専門は学習論、道徳教育、コミュニケーション論、臨床発達。著書に『問題解決過程における知識の獲得に関する研究』（風間書房）。

筆者は心理学の立場から、複数の人間が協力し合い、対話し合いながら学びを構築するという協同学習を研究テーマとしています。そしてこれらの研究をとおり、小学校での授業において対話と協同をととした学習形態の開発を目指しています。

こうした研究をとおりてみた鹿児島県の教育には大きな特徴があることがわかります。それは、鹿児島県は全国でも北海道に次いで二番目に複式学級（少人数の2個学年編成）が多いという点です。その理由は、鹿児島県では離島山間部に多くの小規模学校が存在しているところにあります。

従来、複式学級の利点的特徴としては、異年齢集団による協同学習と間接指導時（教師が別の学年を指導している時間帯）における児童同士の自主学習があげられてきました。

しかし異年齢集団による協同学習は、算数といった系統性が高い教科では学年をはずした異年齢集団による協同学習はほとんど実施されておらず、一つの教室で学年ごとに分かれた授業がなされています。この状態は、系統性が高い教科では複式学級の特徴はまだまだ十全に生かされているとは言えません。

こうした現状を踏まえ筆者は複式学級を対象に、系統性が高い教科においても異年齢集団による協同学習の成果を生かすための学習方法を開発してきました。この過程のなかで複式学級の今後の可能性は、間接指導時における同学年の児童同士の自主学習のみにとどまらず、系統性が高い科目での上学年と下学年との学び合いにあることが明らかになりつつあります。この点を明らかにすることで、これまでになかった複式学級特有の学習環境構築が可能になると考えています。



焼酎「進取の気風」

鹿児島大学ブランド焼酎「進取の気風」完成！

大学憲章の理念と地域の特性を活かした新しい芋焼酎「進取の気風」が完成しました。本学とメーカーの共同で開発した宇宙篤姫酵母を使った黒麹仕込みで、独特の深い甘みと華やかな香り、アルコール度数38度のとろつとした焼酎です。水色の瓶に題字は教育学部の松清秀一先生が、ラベルデザインは和田七洋先生が担当しました。2月25日からインフォメーションセンターで販売しています。ほかにも同センターでは、各種大学ブランド焼酎や農学部附属農場生産物、鹿大オリジナルグッズなども販売しています。詳しくはホームページをご覧ください。

(<http://www.kagoshima-u.ac.jp/about/info-center.html>)

●問い合わせ先 099-285-3864（インフォメーションセンター平日9時～17時30分開館）



<表紙>

● 鹿児島大学病院霧島リハビリテーションセンター(写真・赤屋根の建物)と霧島温泉郷

自然豊かな霧島温泉郷にある霧島リハビリテーションセンターは、世界を視野に入れた最先端・高水準の治療を行う施設。麻痺を回復させる手技「促通反復療法」(川平法)をはじめとする先進的なリハビリテーションを実践している。センターの敷地内からは温泉が湧き出し、温熱療法などに利用されている。

鹿大ジャーナル/第192号 平成25年3月発行
【編集・発行】鹿児島大学広報センター
〒890-8580 鹿児島市郡元一丁目21番24号
電話 099-285-7035 FAX 099-285-3854
E-mail sbunsho@kuas.kagoshima-u.ac.jp

この冊子には、環境対応型インキとして、植物由来の油を配合したインキ「植物油インキ」を使用し、環境負荷にも配慮しております。

